法学部国際関係法学科 4 年
A0132121
小泉　由子

"African music and liberation"

この論文では、南アフリカ共和国のアパルトヘイト撤廃への道のりにおいて人々と音楽がどのような影響を与えたかということを紹介し、そこから音楽と社会の結びつきについて考えたいと思う。

私がこのようなテーマに興味を持ったきっかけは『ＡＭＡＮＤＬＡ！』（監督：リー・ハッシュ／2002 年／南アフリカ・アメリカ）という映画を観たことにある。この映画では、南アフリカ共和国の人々がアパルトヘイト政策への抵抗の意思を音楽とともに表現し、ついには政府への脅威とまでなった過程が描かれている。私が感動したのは、人々が暴力に暴力で応戦するのではなく、創造性と知性で抵抗しようとしたということである。そして何よりもあのような悲惨な状況にもかかわらず、音楽を奏でる彼らの姿には希望と、どこか陽気さすら感じられたことが忘れられない。ちなみに「AMANDLA!」とはデモのときに叫ばれた「Power to the people」という意味の言葉だそうだ。

またこの映画からは、歴史をつくってきたのは政治家など一部の人間ではなく民衆であったということが実感できた。つまり、教科書的な知識からは見えてこない、人々が団結しデモンストレーションをして撤廃まで追い込んだというプロセスこそが歴史なのだなと気付かされた。そこから社会において民衆が主体性をもって行動することの大切さも再認識したと思う。

この論文ではアフリカの人々の文化や黒人意識運動が中心となるため、彼らが権利を獲得した現在では過去の問題ではないかと思う方もいるかもしれない。しかし、彼らのメッセージは「黒人」という肌の色から差別されることへの抵抗という表面的なことだけではなく、スティーブ・ビコの言葉を借りれば「黒は白という‘正常’からの逸脱」を意味すると信じ込まされる構造への抵抗という意味で、より普遍的かつ現代的なテーマではないだろうか。

第 2 次世界大戦を経てなお戦争のやまない現状を考えると、暴力に対抗できるのは同じく国境のない芸術しかないのではという気がしてくる。音楽だけでなく、ダンスや映画や文学などには戦い、殺しあうことを馬鹿馬鹿しく思わせる力が間違いなくあると思う。私は今回のテーマを探求することで、社会において二の次にされがちな音楽ないし芸術のも

つ力の大切さを訴えたい。

＊参考文献

黒アフリカ史 ： その地理・文明・歴史 / J.シュレ=カナール著　東京 : 理論社 , 1964

南アフリカの歴史 / レナード・トンプソン著 ； 宮本正興, 吉國恒雄, 峯陽一訳
東京 : 明石書店 , 1995

人間の音楽性 / J.ブラッキング著 ； 徳丸吉彦訳

民族音楽学リ-ディングス / 秋山龍英編　東京 : 音楽之友社 , 1980.11

民衆のいる音楽 ： 太鼓と合唱　晶文社 , 1981.1

民族音楽研究ノ-ト / 小泉文夫著　　青土社 , 1979.3